

今週の為替相場見通し (2017年5月8日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		111.20 ~ 113.04	112.81	111.00 ~ 114.50
ユーロ	(ドル)		1.0875 ~ 1.0999	1.0999	1.0900 ~ 1.1150
(1ユーロ=)	(円)		121.37 ~ 124.05	124.00	123.00 ~ 125.50
英ポンド	(ドル)		1.2831 ~ 1.2984	1.2984	1.2870 ~ 1.3150
(1英ポンド=)	(円)	*	143.82 ~ 146.45	146.40	145.00 ~ 149.00
豪ドル	(ドル)		0.7368 ~ 0.7556	0.7415	0.7200 ~ 0.7600
(1豪ドル=)	(円)	*	82.68 ~ 84.55	83.63	82.00 ~ 87.00

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 和地 淳史

(1) 今週の予想レンジ: 111.00 ~ 114.50 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

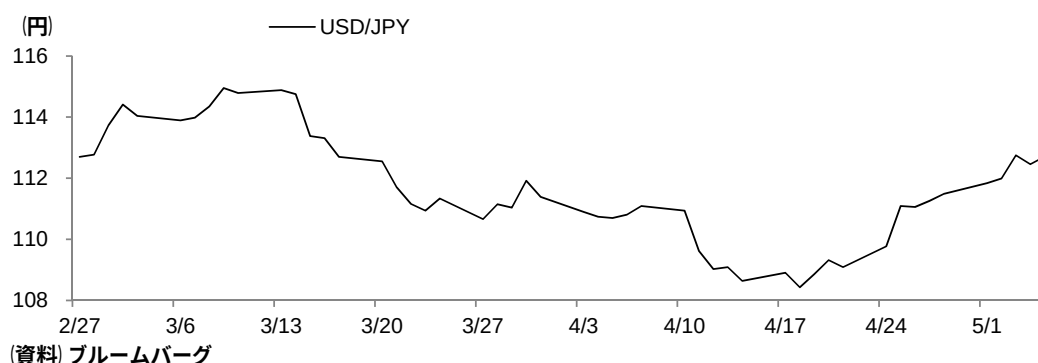
先週のドル/円相場は、底堅い展開となった。週初1日、週末の北朝鮮ミサイル発射を受けて、シドニー時間にドル/円は週安値となる111.20円まで下落した。しかし、その後は押し目買いが優勢となる中、米上下両院が歳出法案で暫定合意したと報じられたことを受け、111円台後半まで反発した。4月ISM製造業景気指数などの米経済指標が下振れたことを背景に売り売りの動きが見られるも、ムニューシン米財務長官が税制改革や超長期債の発行について発言したことですぐに値を戻した。2日、前日の流れを引き継いで112円台を回復。3日、4月ISM非製造業景気指数が良好な結果となったことで、112円台前半まで上昇。その後も、「米財務省が超長期債発行のコストと利点を調査中」と報じられたことに加えて、発表されたFOMC声明文では「1~3月期の景気鈍化は一時的である可能性が高い」と記されたため、米6月利上げ期待が高まり、ドル/円は112円台後半まで上昇した。4日、フランス大統領選挙候補者によるTV討論会後の世論調査では、討論はマクロン氏が勝利と63%が回答したことを材料にユーロ/円が上昇。ドル/円も週高値であり3月17日以来の高水準となる113.04円をつけた。しかし、その後はWTI原油先物が供給過剰懸念により急落したことでリスクオフの動きとなり、5日はアジア時間に112.09円まで押し戻される場面が見られた。注目された米4月雇用統計は、非農業部門雇用者数・失業率ともに良好な結果となる一方、平均時給が悪化したことでドル/円は112円台前半で推移。その後、6月利上げ期待を保つには十分な結果であったとの見方や原油回復が意識され、ドル/円は底堅く推移し、112.81円で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い展開を予想。米労働市場は堅調なことが示され、フランス大統領選ではマクロン氏が勝利。先週の原油急落時や米雇用統計直後など売りが一時的に強まる場面でも112円台を維持しており、市場参加者の押し目買い意欲は強い状況か。テクニカル面においても、一目均衡表の雲の上抜けを狙うとともに、昨年12月からの下降トレンドからの脱出を狙える水準にあり、買いやすい地合いにある。また、12日(金)の米4月小売売上高や米4月消費者物価指数(CPI)の発表まで大きく相場を動かす材料は予定されていない。両指標(前月比ベース)ともに数か月ぶりのプラスの伸びが予想されている中では、少なくとも発表までは底堅く推移しやすいか。ただし、先週はオバマケア代替法案の下院可決が買い材料の一つとなったが、米上院コーカー議員が指摘するように上院通過は難しい状況。北朝鮮動向や来月の英総選挙とともに、同法案を巡るヘッドラインには注意が必要となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/1~5/5)の値動き:

安値 111.20 円 高値 113.04 円 終値 112.81 円



2. ユーロ

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1150 123.00 ~ 125.50 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロは対ドルではレンジ推移後、週末にかけて上昇、対円では週を通して大きく上昇した。1日、1.09近辺でオープンしたユーロ/ドルは、米経済指標が軒並み事前予想を下回ったことから一時、1.0923まで上昇。しかし、米上下両院が予算案で暫定合意したとの報道やムニューシン米財務長官の「超長期債は米国にとって完全に合理的となり得る」とのコメントを受けて米金利上昇・ドル買いとなると1.09近辺まで押し戻された。ユーロ/円はドル/円の上昇に連れ高となり121円台半ばから122円ちょうど水準まで堅調に推移した。2日、欧州時間では良好な英国経済指標を受けてユーロ/ポンドが下落する動きに連れられユーロ/ドルも1.0888まで軟化する場面も見られたが、米金利上昇が一服したことやユーロ/円の続伸にサポートされて値を切り返し1.0930台まで反発した。ユーロ/円は、東京時間から底堅い株式相場にじり高となると、欧州時間のポンド/円の上昇に連れ高となり122円半ばまで堅調推移した。3日、FOMCは市場予想通り現状の金融政策は維持となったが、「労働市場は引き続き改善した」「1~3月期の成長減速は一過性となる可能性が高い」とした声明文がタカ寄りだと捉えられると米金利上昇とともにドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.08台後半まで下落。ただ、ユーロドルの下落幅がドル/円の上昇幅で打ち返されたことからユーロ/円は引き続き122円台半ばから後半で底堅い値動きを見せた。4日、商品市況が悪化するなか、ユーロ/豪ドルやユーロ/カナダドルが上昇、ユーロ/ドルも1.09台前半までショートカバーが入ると、仏世論調査でマクロン候補の支持率がルペン候補のそれを大きく上回ったことが報じられると一段とユーロ買いが強まり、一時1.0988まで値を伸ばした。ユーロ/円は123円ちょうどを上抜け、123円台半ばまで大幅上昇した。5日、良好な米4月雇用統計を受けてユーロ/ドルは1.09台後半まで売られたものの、その後米金利が低下するとユーロ/ドルは買い戻され1.09台後半まで反発。ユーロ/円はユーロ/ドルの値動きに合わせて123円台半ばから一旦123円ちょうど近辺まで下落後急反発し、結局124円近辺で越週した。

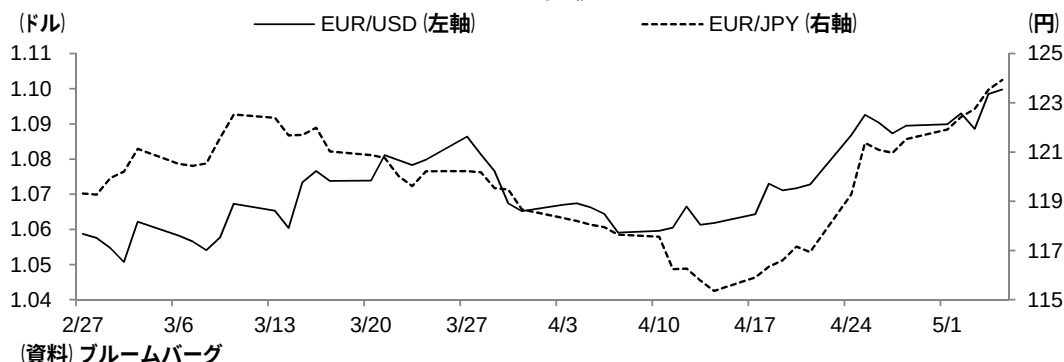
今週のユーロ相場は上昇を予想する。最重要イベントであった仏大統領選は事前の世論調査からマクロン候補の勝利が確実視されていたため、週初は一時的に利食い売りが出る可能性は高いものの、週を通じては欧州政治の不透明感後退を受けてユーロのショートポジションを巻き戻す動きが継続すると考える。そのほかでは、10日(水)ドラギECB総裁講演、12~13日G7財務相・中央銀行総裁会議、12日(金)ドイツ1~3月期GDP速報などが注目される。足許、ユーロ/ドルは昨年のランプ相場の起点まで反発してきており、一部、ECBの金融緩和姿勢の見直し観測も燦るなか、心理的節目の1.10を明確に抜けて行くようであれば一段とユーロ買いが強まろう。地政学リスクは小康状態にあることからユーロ/円も先週の流れを引き継ぎ、上昇トレンドを維持すると考える。リスクシナリオとしては、FRBメンバーのタカ派コメントを受けたドル買いユーロ売り、ドラギ総裁のハト派コメントを受けたユーロ売りなどが挙げられる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/1~5/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0875 高値 1.0999 終値 1.0999

(対円) 安値 121.37 高値 124.05 終値 124.00



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2870 ~ 1.3150 145.00 ~ 149.00 円

(2) ポイント [先々週・先週の回顧と今週の見通し]

先々週・先週の英ポンド相場は、対ドル、対円で上昇。対ユーロでは急落が先行したものの、その後は方向感に乏しい小動きに終始した。24日の金融市場は、仏大統領選1回目投票の結果を受けて始まった。中道・無所属のマクロン候補が1位通過したことで、近い将来の仏のEU離脱などに対する警戒感は薄れた。この結果を受けユーロが急騰した他、世界的な株高、円安、新興市場通貨高といったリスク許容の動きが広く観察された。対ドル、対円では、週明け直後こそポンドもユーロ急騰に連れて上昇したものの、程なく反落。それでも前週末の終値水準を割り込むことはなく、その後ポンドは堅調推移を基調とした。対ユーロでは大きく水準を切り下げる値動きから、この間軟調推移を支配的としたものの、26日から28日までは堅調推移を見せた。英固有の要因では、28日に発表された英1~3月期GDPが市場予想を若干下回ったことが、対ドルや対ユーロでのポンド軟調の要因になったものと考えられた。連休(4月29日~5月1日)明けに相次いで発表された英各種PMI(2日製造業、3日建設業、4日サービス業)は軒並み市場予想を明確に上回ったものの、ポンドの反応はほとんど読み取ることができなかった。4日投票された英地方選は、(中央政界の)与党保守党の圧勝で終わった。ポンドは心持ち買いで反応し、5日には対ドルで昨年9月来、対円で昨年12月来の高値を僅かながら更新した。先月18日の解散総選挙発表で、「保守党の圧勝-安定政権樹立の可能性」が好感され、ポンドが上昇した経緯を鑑みれば、地方選における保守党圧勝もポンド押し上げ要因と読むことはできただろう。

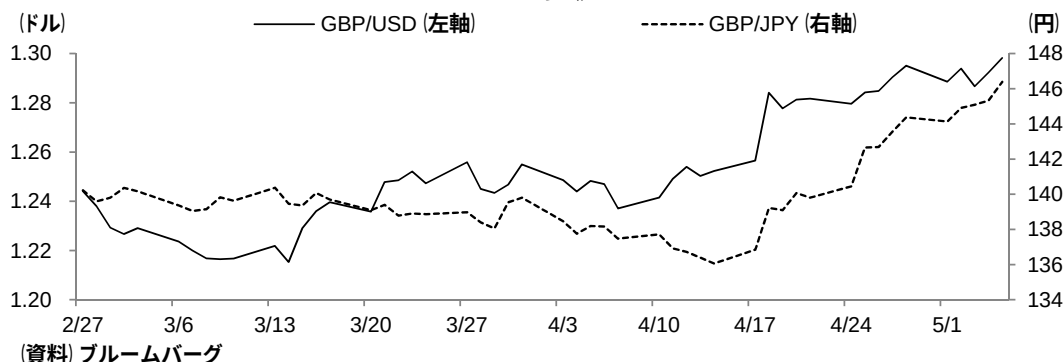
今週の英ポンド相場は、堅調推移を予想。対円の昨年12月の高値(12月15日の148.46)や対ユーロの直近高値(4月18日の0.83145)といった水準は、現状で「射程距離」に入っていると言え、当面はこういった水準を試し、上抜けをうかがう展開が支配的になる可能性が高いのではないかと。足元のポンド堅調の背景には、6月8日の総選挙における保守党の圧勝、安定政権樹立に対する期待感があるものと考えられる。ただし、与党保守党のEU離脱交渉の方針については「(メイ首相の英国内における)強い指導力が、交渉を(英国にとって)より優位に運ぶことを可能にする」という点以外、ほとんど明らかになっていない。通貨市場が保守党大勝を好感してポンドを買っている背景には、新政権が(EUとの自由貿易協定を結ばない)ハードブレクジットを回避するために、EUからの移民の受け入れなどについて一定の妥協を打ち出す可能性に対する期待があるのではないかと。EU側の離脱交渉責任者であるバルニエ欧州委員が「英におけるEU市民の権利維持(当人の居住権だけでなく、家族を呼び寄せる権利までも含めて)が交渉の大前提」などと強硬姿勢を打ち出す一方で、英側からは「EU離脱後も(移行期間中は)人の移動の自由をある程度認める」といった観測などもちらほら聞かれる。こうした点は、保守党の選挙公約が発表されれば明らかになるはずだが、それまでは根拠に乏しい観測も含めて楽観的な思惑がポンドを押し上げる可能性も見込める。11日(木)の英中銀金融政策委員会は現状維持が市場の一致した予想で、その限りであればポンドが材料視する余地は少ない。同日には他に英3月製造業・鉱工業生産、英3月貿易収支の発表も予定されるが、金融市場が材料視する可能性はやはり高くはないだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/1~5/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2831 高値 1.2984 終値 1.2984

(対円) 安値 143.82 高値 146.45 終値 146.40



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 0.7200 ~ 0.7600 82.00 ~ 87.00 円

(2) ポイント [先々週・先週の回顧と今週の見通し]

先々週から先週にかけての豪ドル相場は、じりじりと下値を切り下げる展開。4月24日、前日の23日に実施された仏大統領選挙の第一回投票にてマクロン氏が得票率で首位となると、豪ドルは0.75台後半でギャップアップしてオープン。その後は0.75台半ばで揉み合う展開。25日、豪州祝日で市場参加者が少なくなる中、トランプ米大統領の税制改革案の発表に対して期待感が高まる展開にドル買い優勢地合いとなり豪ドルは0.75台前半まで小幅下落。26日、豪1～3月期CPIが市場予想を下回ったことや米国で税制改革案が発表されたことなどを背景に豪ドルは0.74台半ばまで軟化する展開。27日も前日からの豪ドル相場の軟調地合いが続く中、一時0.7440まで下落。28日、豪1～3月期生産者物価指数(PPI)が発表されるも市場の反応は限定的となり0.74台後半で横ばい推移。米長期金利の上昇を背景にドル買いが強まる展開に一時0.74台半ばまで軟化するも、米1～3月期GDPが市場予想を下回ると豪ドルは0.74台後半まで反発して越週。週明け5月1日の豪ドルは0.74台後半でオープン。欧州など多くの国が休日となり市場参加者が限られる中、豪ドルは前週末にかけて約4か月ぶりの安値圏まで軟化していたこともあり、0.75台前半までじりじりと値を上げる展開。2日、注目された豪州準備銀行(中央銀行、RBA)理事会では政策金利が据え置かれ、声明文についても概ね前回会合と同様の内容となり、市場予想通りの結果となったことで豪ドル相場の反応は限られ0.75台前半で横ばい推移。3日、FOMCでは市場予想通り政策金利が現状維持となるも、声明文がタカ派寄りを受け取られて米長期金利が上昇する展開にドル買いが強まり、豪ドルは0.74台前半まで大幅下落。4日、豪3月貿易収支の黒字額が市場予想を下回ったことや、軟調な商品価格などを背景に豪ドルは一時0.73台後半まで下落。5日、公表されたRBAの四半期金融政策報告書では楽観的な経済見通しが示され、週末に控える仏大統領選決選投票を前に様子見姿勢が支配的となる中で豪ドルは0.74ちょうど付近で揉み合う展開から結局対ドルでは0.74台前半、対円では83円台半ばで越週した。

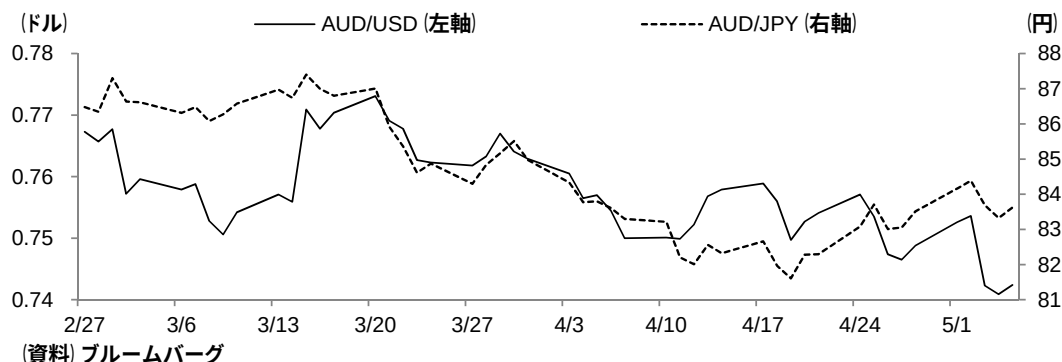
今週の豪ドル相場は上値の重い展開が続くと予想。豪州における主要イベントを通過し今週は主立った経済指標の発表なども予定されておらず、ドル相場主導の相場展開となりそう。2日のRBA理事会では政策金利が据え置かれ、声明文では引き続き前向きな経済見通しが示されるも、賃金の伸びについては当面鈍い状態が続くと予想されるとの一文が新たに追加された。5日に公表された金融政策報告書では2018年半ばまでのGDP見通しが+0.25%ポイント引き上げられ、+2.75%～3.75%とし、経済成長に対する楽観的な見方が示され、依然として追加利下げが考慮されていないことが示唆された。仏大統領選を巡る欧州政治不安が後退する格好にリスクセンチメントの改善が期待され得るところではあるものの、国内では賃金上昇に対する懸念が残る中で原油相場などの商品市場は足元軟調推移が続いており、豪ドルが積極的に買われる展開は想像しづらい。ドル相場については、強弱入り混じる米経済指標が足元で見られるがFRBの姿勢を変える程ではなく、依然として6月FOMCにおける利上げ期待が強く意識される展開に堅調推移している状況。豪ドル相場は、底堅いドル相場を背景に基本的に上値の重い展開が続くと予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/1～5/5)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7368 高値 0.7556 終値 0.7415

(対円) 安値 82.68 高値 84.55 終値 83.63



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。